

ヴァイオリニストTAIRIKの戯言

〔第79回〕

弦が揺れると、僕は季節の風になる

+ 文 佐田大陸 text by Tairik Sada +

自分を生きる

ふと「私はハイフェッツ※になれない」と命を絶ってしまった人がいるという話を思い出した。

ヴァイオリニストは難しい職業だ。幼少期から楽器に触れていないと技術が身に付かないし、ある程度リターンが約束されたお医者さんとは違い、お金がかかるのいつまでもハイリスクである。

上手な人は若くして上手だし、そうでない人は年齢を重ねてもそうでない。でも上手いという理由だけでコンサートに行きたくなるわけでもないし、技術的に決して上手とはいえない人の演奏で感激することもある。

20年前までは、確かな実力があれば業界内で困らずに仕事にありつけた。しかし今はSNSの活用がほとんど必須だ。人気や集客を取り付けたものが勝つ時代になったので、実力だけで生きていくには、トップオプトップの実力者以外は本当に厳しくなった。

ヴァイオリンやピアノを使ったクラシック音楽はヨーロッパに端を発する。偉大なる作曲者が残した作品を、人が代わる代わる何度も再現をしている。20世紀の偉大な巨匠達もこの上ないほど素敵な演奏の多くを、音源に残している。

最初の話に戻るが、再現音楽に関しては確かにハイフェッツやオイストラ

フを聴いていればもう自分の出る幕はないと思うことはよくある。でも決してそうではないと思う。

時代によって世の中の価値観も変わり、伝わるもの、人々の心が必要とするものも変化する。同じ時代の気持ちを汲み取って、自分なりに咀嚼をし、形にして、発信することが「今」できる唯一無二なことだと信じ活動を続ける。

TSUKEMENは16年目に入り、5月19日神戸から新しいツアー「キャンドルのぬくもり」が始まる。

名曲をアレンジして演奏するスタイルから、今を切り取って届けるスタイルに。悲しいかな、全国に被災地が増えていくこの日本で、音楽で自分たちができることは何なのか日々話し合う。

必要なのは誰かの真似事ではなく、それが高かろうと低かろうと、弱い自分を認めて自分の中の山の頂上を目指していくこと。これらは音楽のみならず「自分なんかは今を懸命に生きる必要があるのか」という話と同義だ。

必ずどんな状況でも活路はあると信じて動いていきたい。

どうしようもなくちっぽけな自分を感じたとしても、誰のトレースではない自分の人生を生きたいと願う。

profile

TAIRIK(たいりく) ヴァイオリニスト/ ヴィオリスト/ 作曲家

桐朋学園大学音楽部卒業、同大学院修了

ヴァイオリン&ピアノによる3人組インスト・ユニット「TSUKEMEN」を結成後、キングレコードよりメジャーデビュー。最新アルバム「HAPPY キッチン」など、リリースしたCDはクラシック・チャート1位を次々と獲得。国内にとどまらず、アメリカ、アジア、ヨーロッパなどで700本を超える舞台に立ち、50万人以上の観客を魅了。近年ではTSUKEMENに加え、古澤巖氏と結成した弦楽四重奏団「品川カルテット」、水谷晃氏と結成した「MIZUTANI×TAIRIK」も大反響を呼んでいる。

「徹子の部屋」「題名のない音楽会」「きょうの料理 栗原はるみのキッチン日和」など数多くのTV番組に出演。

SBCラジオ「TSUKEMEN TAIRIKの信 TAIRIK 発見」毎週月曜 15:00 台にレギュラー出演中。

<https://tsukemen-music.com>



※ヤツシャハイフェッツ(ロシア出身・1901〜1987)とは、20世紀ヴァイオリン界を席巻した大ヴァイオリニスト。